

巻頭エッセイ

瀬戸内海クルーズ



藤田郁夫
国土交通省近畿地方整備局

テーマが決まらず悶々としているうちに締め切りが迫ってきました。窮すれば通ず。今朝（3月10日）のNHK地方版のニュースで、大阪市港湾局が保有する帆船「あこがれ」の航海が取り上げられていました。一般から乗組員を公募し、3月8日から21日までの予定で小笠原まで航海するようです。NHKの報道ですと、当初青少年を対象に航海を始めたところ、熟年世代の乗り組み希望も多く、帆船の操作を始めとする共同作業による航海に関心が高まったのではないかとのことでした。

帆船には一種独特のイメージがあり、これが多くの方の興味を誘っているものと思われませんが、一方、船旅の良さも見直されつつあると聞きます。クルージングの人気の高さ、とりわけ定年を迎えた世代がゆったりとした時間を過ごすべくクルーズ船に乗り込んで各地を回っているようです。筆者自身にはクルーズ船に乗った経験はありませんが、豪華旅客船の船内を見せて貰ったことは何回もありますし、また某県に出向していたときにはクルーズ船の寄港を実現するべくマレーシアに出張してクルーズ会社を訪問したこともあります。折から、筆者の勤務地神戸はクルーズ船のラッシュとなっています。3月4日には飛鳥II（50,142トン）、6日にはQueen Elizabeth 2（70,327トン）、8日にはSaga Ruby（24,492トン）、10日には小ぶりのSpirit of Oceanus（4,200トン）と、目白押しです。

神戸で勤務していると瀬戸内海のことを意識せざるを得ません。筆者が阪神間のある高校に通っていたウン十年前、修学旅行は大体九州と決まっていました。行きは列車で帰りが船旅でした。あの時の船は関西汽船だったように思いますが定かではありません。会社名は兎も角、今で言う瀬戸内ナイトクルーズであったことは間違いありません。修学旅行の独特の雰囲気の中、別府港から銅鑼とともに出港する時には映画の主人公になったような気分で、修学旅行の終わりと高校生活の区切りを意識して一種もの悲しい思いがしたものでした。船上では気のあう友人同士ぶらぶら歩いたり、雑談したり。就寝時間はお決まりの枕投げから始まる大騒ぎ。付き添いの教師に注意されて強制的に横になります。しかし、2等船室の雑魚寝だったこともあるのでしょうか、ほとんど寝ることが出来ずに朝を迎えたことを覚えています。

今の勤務になって1年。この間、いろいろな方とお

目にかかる機会がありました。その中で、神戸発のクルーズ、とりわけ瀬戸内海クルーズを熱心に語る方にお目にかかりました。瀬戸内海の魅力は十分に発掘されておらず、今後大きな発展の可能性がある素晴らしい資産であるとお話です。高校時代の修学旅行を思い出しながらお話を聞いていると、確かにそうだとの実感がしてきます。世の中は高速交通時代を迎え、また国際化のかけ声の下、高校の修学旅行は言うに及ばず中学の修学旅行でさえ飛行機で遠隔地や外国までひと飛びの時代です。しかしながら、ファースト・フードの隆盛が落ち着き、最近ではスロー・フードという言葉も聞きます。飛行機で一気に飛んでいく旅行がファースト・トラベルとすれば船によるゆったりとした旅行はスロー・トラベルとでも呼ぶべきではないか。船旅は熟年者に人気が出てきたと聞きますが、修学旅行でも魅力の見直しがあっても良いのではないかと、思います。瀬戸内海は、昔から生活や交通の場としてばかりでなく、通商や外交のルートとして遣隋使、遣唐使、朝鮮通信使など多くの人々が行き交い、入り江や湾に多くの文化遺産があります。これらは素晴らしい観光資源になるものと思います。また、新しい観光資源として、例えば本四架橋もクルーズ観光の目玉のひとつになるように思われます。

船旅の醍醐味は何をおいても食事だと、瀬戸内海クルーズを熱心に語ってくださった方にお聞きしました。三度の食事が美味しいこと、これに尽きるとか。筆者も単身赴任の神戸であちこち食い物屋を覗いていますが、確かに食事の魅力は大きい。この点、瀬戸内は材料に事欠きません。味付けと素敵な雰囲気、食事の魅力も十分に発揮できるポテンシャルを秘めているように思います。

しかし、乗り物に強くない方にとって特に船旅は馴染みにくい交通手段でしょう。今後の技術開発の方向として、波による動揺が小さいこと（これについては最近の船はジェットフォイル等、昔に比べると格段に揺れの少ない高速船が出てきたのは嬉しい）と並んでエンジン音・動揺の解消が必要だと思います。最近の船の技術には疎いのですが、先述の修学旅行の時は勿論、大学生になって北海道まで連絡船で渡った際も、エンジン音と船体震動によりいつまでも眠りにつけなかった記憶があります。